

中山間地域における高齢者の「生きがい」について ～高知県梶原町を対象にして～

1130494 三浦 亮太郎

高知工科大学マネジメント学部

1. 背景

近年、日本では少子高齢化が深刻な社会問題として注目されている。少子高齢化は特に中山間地域での進行が著しく、交通の不便性や産業の衰退に伴い、労働人口である若者の都市への流出によって過疎化が進行している。本研究は高知県梶原町を調査対象とすることで、中山間地域という生活する上で不便な状況の中でも、そこで生活し続けられる理由やそこから得られる「生きがい」は何であるのかなどを明らかにしていくものとする。これまでの高齢者の「生きがい」に関する既往研究では、高齢者の属性（性別や世帯構成）や彼らの生活構造までを加えた分析は行われていないのである。そもそも「生きがい」とは、高齢者を取り巻いている周辺環境の影響により構成されている可能性が高いと私は考えている。

2. 目的

高知県の梶原町をフィールドワークの対象として、①中山間地域の高齢者がその地で残りの人生を充実させている（生きがいとしている）ものを明らかにする。②各々の高齢者のライフサイクルに着目することで違いを見つけ、生活構造を明らかにする。という2点である。

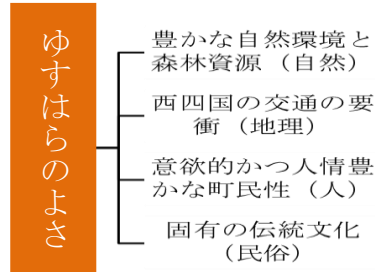
3. 研究方法

本研究は、はじめに既往文献の調査をすることで、高齢者の「生きがい」の現状や課題を整理した。そして、調査する質問内容をまとめ、同時に梶原町における高齢化社会の現状と課題を把握した。次に、梶原でアンケート調査とヒアリング調査を並行して行い、その結果を分析した。最後に、まとめとして高齢者の「生きがい」について明らかにしていく。

4. 梶原町の概要

4-1 梶原町の特性

梶原町は、高知県中西部、愛媛県との県境に位置し、北部には、東西23kmにわたる雄大な石灰岩地帯の台地「四国カルスト高原」が広がっている。面積は23,651k㎡で、そのうち91%が森林である。平成22年度の国勢調査速報値より、人口は3,986人、主要な産業は、農業や林業などの第1次産業である。



4-2 梶原町の高齢化社会の現状

梶原町は、平成22年時点で高齢化率40%となっているため、高齢者を対象とした医療・福祉のサービスが充実している。主な施策としては、平成21年4月から、町内に設置された光ファイバーによりIP電話を使用できるようになった。町内に限り無料で通話できることは、高齢者にとって「話し相手がすぐそばにいる」という考えから、より一層安心感が芽生えたようである。また、高齢者の健康づくりの推進を目的として、病院受診などの外出の際に、タクシー費用の一部を助成している。このように、梶原町の高齢者政策は高知でもトップレベルであり、梶原町民にとって老後の不安がないものとなっている。

5. 調査の概要

5-1 調査の対象

一人暮らしの高齢者（8名）、夫婦で暮らす高齢者（6名）、夫婦と孫で暮らす高齢者（7名）を対象に調査を実施した。調査対象者は70歳以上で梶原町に長期間滞在している家庭をサンプリングして抽出した。

5-2 調査の内容

高齢者と対面形式で、アンケート調査とヒアリング調査により1～2時間程度の雑談を交えながら行った。期間は2012年10月中旬から11月上旬の間である。

5-3 分析手法

ヒアリングの調査時には、事前にICレコーダーを用意した。ヒアリングを分析する際には、まず、メモをした内容を羅列して、そしてICレコーダーに保存した内容をもう一度聞き、同じ内容や発言の強いワードを重点的に確認した。さらに、ヒアリング結果を①生きがい、うれしいこと、生活するうえ

での張り合い②生活スタイル③梶原で生活することについての不満点や要望④梶原の魅力という4つに分類して、分析した。最後に、高齢者の8割以上の方が共通して話していたことを整理した。

6. 結果

6-1 ヒアリング調査の結果

6-1-1 一人暮らし世帯

手芸やパチンコ、クラブ参加など様々な生活スタイルをもっている。そして交流や健康であること、子供や孫が会いに来てくれるなどが「生きがい」の要因である。しかし、伝統行事の衰退や若者の減少により寂しさを感じている。

6-1-2 夫婦世帯

車を運転する方が多く、買い物などで時々愛媛や須崎まで遠出している。そして、1人暮らし世帯と同じように交流や規則正しい生活をするなどで、「生きがい」を感じている。

6-1-3 夫婦と孫世帯

普段から子供や孫と接しているために、「活性化してほしい」や「仕事がない」など、他の世帯からは出なかった意見が、多く出てきた。やはり、孫の存在、家の跡継ぎがいるなどで他の世帯よりも「生きがい」を感じている。若者と接するために外食をする人がいる。

6-2 高齢者の生きがい

- ・一人暮らしの高齢者の方は他と比べて寂しさがあるが、交流や趣味を持つなどで生きがいを感じている。
- ・たとえ生活するのに不便であったとしても、ほとんどの高齢者が、慣れや安心感、出生地であるということから梶原に愛着心をもって生涯をおくりたいと考えている。
- ・自然の豊かさや医療・福祉の充実、人情があるなどが梶原の魅力である。
- ・どの世帯も、孫の存在が、生活することに大きな原動力となっている。

6-3 調査結果による世帯と地域性の特徴

一人暮らしの高齢者は、孤独感が強い反面、夫婦と孫で暮らす高齢者は、普段から子供と普段から接し、「生きがい」を持続させる傾向にある。夫婦家庭は家事や畑仕事など共同でして、お互いの必要性を認識することで「生きがい」を感じている。

初瀬区や松原区は、町の中心部からの出入りの際に、道路が舗装されていなく、交通が不便な状況に位置している。そ

のために、祭りなどで松原区に人が出入りするという嬉しさに生きがいを感じている。また、住民のネットワークも、他の地域よりも堅く結ばれている。他の地域では、国道に近く人の出入りが多いので、このような地域性による「生きがい」は見られなかった。

6-4 梶原町活性化への提案

本研究の調査を行う中で、高齢者の方々は話好きでご自身の体験や生き様などを数多く語って下さった。そこで私は以下の対策を挙げることで梶原町の活性化につなげたいと考えている。

- 多種多様な経験や知恵をもつ高齢者が若者に伝授する場を設ける。方法として、2~3名の若者が高齢者の自宅に訪問して、彼らの生き様やライフサイクルを聞くことを提案する。
- 子供好きの人が多くと思うので、保育園児や幼稚園児と遊んだり、作業したりするなど一緒に過ごす。
- ペットの飼育をすすめて「生きがい」を持ってもらう。

7. まとめ

- ・本研究をまとめると以下の3点である。
- ・梶原町の高齢者の「生きがい」は、「この地で生まれて、この地で死にたい」という愛着心があること。
- ・高齢者政策は、町民にとって「生きがい」の一つとなり、役立っている。
- ・高齢者が自分の「生き様」を次世代に伝える「場」の創出が必要であること。

8. 今後の課題

- ・梶原町だけでなく、香美市や他の地域などでも調査の必要性。
- ・町外や県外から、引っ越して来た高齢者などを対象とした調査。

参考文献、引用文献、協力者

- ・「生きがいを測る」 近藤勉 著
- ・梶原町高齢者福祉計画・介護保険事業計画 平成24年度
- ・第6次梶原町総合振興計画 平成23年度
- ・梶原副町長 吉田尚人 様
- ・梶原町保健福祉支援センター 久保八栄美 様
- ・梶原町在住 高齢者様方